

温故知新～「大震災」から「大復興」へ～

財団法人 宮城県消防協会 会長 坂本 長男



この度の東日本大震災におきまして、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、ご遺族に対し、深く哀悼の意を表します。また、被害に遭われた皆様に心からお見舞申し上げます。

そして、地震発生直後から地域住民の避難誘導等の任務に当たり、その最中に不幸にして津波に襲われ殉職された消防職団員の方々に対し、心からお悔やみ申し上げるとともに、最後まで国民の安全安心のために使命を全うされたその姿勢に、深く敬意を表します。

各地、大変な状況の中ではございますが、被災地の一日も早い復興を強く願いながら、宮城県消防協会として果たせる役割を担っていく所存でございます。

2011年3月11日14時46分頃、超巨大地震が東北地方を襲った。

地震は、日本国内の地震観測史上最大規模のマグニチュード（M）9.0を観測し、宮城県栗原市で最大震度7を記録した。また、大規模な津波によって、三陸沿岸をはじめとする全国各地で被害が発生した。特に岩手県、宮城県、福島県の3県では、海岸沿いの集落や河口周辺から上流に向け数キロメートルにわたる広範囲が水没するなどの甚大な被害が出た。さらには本震及び余震による建造物の倒壊、地すべり、液状

化現象、地盤沈下などの直接的被害のほか、福島第一原子力発電所事故に伴う放射性物質漏れや大規模停電などが発生し、東北地方を中心とした甚大な一次被害のみならず、日本全国及び世界に経済的な二次災害をもたらしている。

「想定外」とは、遺憾至極だった。

近い将来、宮城県沖地震がくる。ここ10年間、宮城県は大地震の発生が警鐘され続けてきた。想定された地震の規模は、マグニチュード（M）7.1から8.0だった。今回発生した超巨大地震と比べると、マグニチュード値に余りにも乖離があった。マグニチュードは、1増えるとエネルギーは約32倍、2増えると約1000倍違うという。想定していた地震の規模が根底からずれていた。想定が甘かったと認めざるを得ない。ただ、3年前にも宮城県は岩手・宮城内陸地震という想定外の震源地で大地震を経験した。地震は“いつどこでどんな規模で発生するかわからない”という教訓を得たばかり。宮城県民の防災意識は高かったはず。津波が到達するまで時間があった。もっと、ゆとりある避難ができなかったものか、悔いが残る。

超巨大地震の約51時間前の3月9日11時45分頃、最大震度5弱の地震が起きている。直ちに、私は栗原市消防団長として市の災害対策本部に向かった。各地の被害はほと

んどない。停電も発生していない。いつもの地震だ、大丈夫。ほっとした矢先の超巨大地震だった。

最大震度7を記録した栗原市の被害は意外にも少ない。この地震を起因とする火災は1件も発生しておらず、建物の倒壊は3件発生したが、幸い負傷者は出なかった。119番通報は、家具の転倒による頭部打撲や割れたガラスを踏んだなどの救急とホームタンクの転倒による漏油の事案だった。このことから、恐らく、あの津波が襲ってこなければ沿岸部の被害もこれほどままでには至らなかったのではないだろうか。

地震の発生から一週間後、やっと津波の被災地に向かうことができた。三日かけて宮城県内沿岸部を縦断した。現地に入り、市街地の変貌ぶりに目を疑った。津波は何もかも押し流していた。街を守るはずの防潮堤は所々で壊れ、水門はねじれたように変形していた。道路は至る所でえぐられ、橋は落ちていた。線路はレールが剥ぎ取られ、進行方向がずれていた。住宅の中まで車両が流れ込み、屋根には船舶が乗っていた。電柱は根元から市街地側に折れ、街灯は引き波で海側に折れていた。津波の後、火災に包まれた一帯もあった。木造の建物は跡形も無く、鉄骨造りの建物だけが異様に残存していた。県南に位置する山元町を訪れると、沿岸部は全くと言っていいほど建造物が残っていなかった。近くにいた人に「ここはもともと田んぼですか」と尋ねると、「家が何十戸も建っていましたよ」と言われた。我々の想像を遥かに超えていた。また、現地では行方不明者の捜索にあたる自衛隊、警察官、消防官、消防団員、家族らしき人々の姿があった。明らかに人手が足りていない現状を目の当たりにした。県内でも被害の少なかった山間部の

我々が支援しなければと、各災害対策本部を訪れ、応援が必要ならばいつでも要請をと奮闘する消防団長方と固い握手を交わした。

地震の発生から約二ヶ月が経過した。しかし、その全貌はまだ明らかになっていない。4月末現在、宮城県内だけでも死者8,000人以上、行方不明者6,000人以上、避難者数は40,000人以上に及んでいる。電気、ガス、水道も完全復旧していない。大震災は現在進行形である。また、最近の報道でマグニチュード(M)8.0前後の余震の発生する可能性が警告されている。教訓を生かしたい。地震は、“いつどこでどんな規模で発生するかわからない”決して油断してはならないだろう。

宮城県は過去50年間で大きな地震を5回経験したことになる。1962年宮城県北部地震(M6.5)、1978年宮城県沖地震(M7.4)、2003年宮城県北部地震(M6.4)、2008年岩手・宮城内陸地震(M7.2)、そして、2011年東北地方太平洋沖地震(M9.0)だ。歴史が物語っているように、大地震はまた必ずやってくる。その将来に向けた最善の対策は、過去から学び将来に生かす「温故知新」の観点だ。「想定外」から「想定内」へ。それにより、たくさんの生命と財産を守ることができるはず。

近い将来、東北地方は災害に強い地域として大復興するだろう。

期待と希望を胸に今を忍ぶ。